

## 日11-46 (ショートコメント)

### 「小川の辺」 ★★★

2011 (平成23) 年4月28日鑑

賞<東映試写室>

監督：篠原哲雄

原作：藤沢周平『海坂藩大全』（文藝春秋刊）、『闇の穴』（新潮文庫刊）

戌井朔之助（海坂藩士）／東山紀之

田鶴（朔之助の妹、佐久間の妻）／菊地凜子

新蔵（戌井家に仕える若党）／勝地涼

佐久間森衛（海坂藩を脱藩した浪士）／片岡愛之助

戌井幾久（朔之助の妻）／尾野真千子

戌井以瀬（朔之助の母）／松原智恵子

助川権之丞（海坂藩月番家老）／笹野高史

鹿沢堯伯（海坂藩主家の侍医）／西岡徳馬

戌井忠左衛門（朔之助の父）／藤竜也

2011年・日本映画・103分

配給／東映

◆ 山形県庄内地方にある海坂藩を舞台とした、藤沢周平時代劇の映画化は8作目。私の採点では前作の『必死剣鳥刺し』（10年）は『たそがれ清兵衛』（02年）、『武士の一分』（06年）に続く3本目の星5つだったが、それは「必死剣」そのものをどう理解するのかという面白さの他、あっと驚く権力闘争の姿と池脇千鶴の怪演(?)のおかげ(『シネマルーム25』196頁参照)。しかして本作は？

「ある事情」によって脱藩を余儀なくされた旧友の元藩士・佐久間森衛(片岡愛之助)を藩命によって戌井朔之助(東山紀之)が討とうとするのに対し、いくら直心流の遣い手とはいえ、朔之助の妹で佐久間の妻である田鶴(菊地凜子)が佐久間の助っ人として兄に立ち向かってくることを心配するという本作の設定はイマイチ。そんなことって現実であり得るの・・・？

◆ 幼少時代から朔之助や田鶴と兄弟同様に育ったという若党の新蔵(勝地涼)が、密かに田鶴に対して身分違いの恋心を募らせていたのは仕方ないとしても、それに勘づいていながらなぜ朔之助は藩命実行の旅に新蔵の同行を認めたの？また、「小川の辺」に住む田鶴を発見するまでのストーリー展開が少し不自然なら、せっかく新蔵の提案どおり、田鶴がいない間にコトを果たしたのに、兄妹の戦い(?)になるのも不自然。朔之助と新蔵は田鶴と遭遇しないうちに、さっさと現場を離れて帰ればいいだけなのでは？

◆ 『バベル』(06年)での菊地凜子の身体を張った演技は絶品だったが、その後の『サイドウエイズ』(09年)、『ナイト・トーキョー・デイ』(09年)、『ノルウェイの森』(10年)での演技は私にはイマイチだった。しかして本作では？

そもそも、あのキツイ目の顔だちは外国(人)向けで、和服姿は似合わないのでは？そんな私の予想が、残念ながら見事に的中。そのうえ、利かん気の強そうな少女時代を含め、田鶴はなぜあれほど兄に反発し佐久間に依存(?)するの？なぜ藩命に従って任務を果たしているだけの兄にあれほど歯向かうの？その点の説得力が十分でないため、つい「お前はバカか！」と思ってしまう。

他方、尾野真千子を一躍有名にした河瀬直美監督の『殯の森』(07年)を私は観ていないが、『真幸くあらば』(09年)(『シネマルーム24』161頁)、『トロッコ』(09年)(『シネマルーム24』70頁)の演技をみていると、この女優は絶対成長株！という感じがあった。本作ではそんなイメージどおり、尾野真千子が朔之助の妻・幾久役として、父・忠左衛門(藤竜也)や、母・以瀬(松原智恵子)に互して、静かだが説得力のある演技を見せている。

◆ 嫁ぐ日の前に田鶴が新蔵に対してみせた本作唯一のラブシーン(?)もイマイチだったが、コトが成就した後、新蔵が今にも刀を抜きそうな姿勢を示していたことに対する朔之助の反応は？兄妹間の斬り合いの最中に「田鶴さまを斬ってはなりませぬ！」と大声をかけた新蔵は、もし田鶴が朔之助に斬られそうになったらひょっとして・・・？

それほど新蔵の田鶴に対する愛が深いといえればそれっきりだが、藩を捨てた佐久間に従って行動を共にしてきた田鶴は、佐久間がいなくなったらその途端に相棒を新蔵に切り換えるの？そんなバカな？と思いつつ、本作のラストシーンを観ていると・・・。

2011 (平

成23) 年4月30日記